

民族藝術学会

〒560 豊中市待兼山町1-1

大阪大学文学部美学科内

tel. 06 850 5120 / 5122

民族藝術学会 第13回大会実行委員会

事務局：多摩美術大学美術学部文様研究室

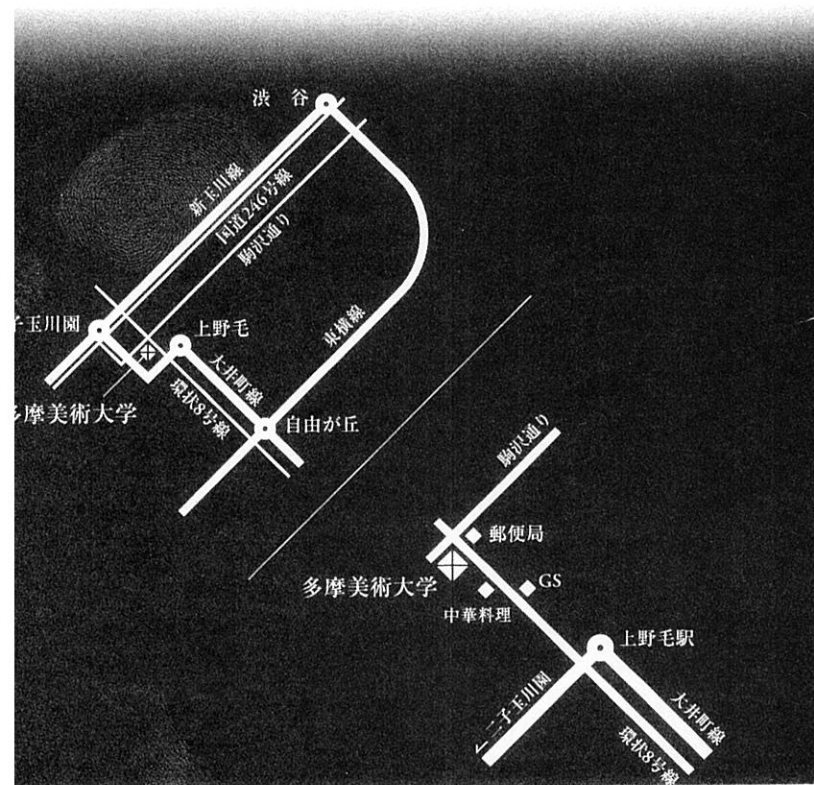
〒192-03 東京都八王子市鎌水2-1723

tel. 0426 76 8611(代) 内線64

fax. 03 3702 2235

民族藝術学会

第13回大会案内



1997年4月27日(日)・28日

多摩美術大学 上野毛校舎



ごあいさつ	0
プログラム	0
シンポジウム「民族芸術と東京」	0
分科会	
A 表現された東京、表現する東京	0
B 発信と受信	1
C 世田谷	1
イベント アラブ古典音楽レクチャーコンサート	1
研究発表	
「南蛮象牙蒔絵茶入」の意匠とカトリック信仰	1
藤山種廣と日本の近代ガラス産業	1
線の魔術師 — インド伝統鍍金職人・ドクラ —	1
総会	1
研究発表	
朝鮮における近代舞踊確立 — 崔承喜と趙澤元の舞踊 —	2
岡本綺堂と江戸の怪談	2
民俗主義のオペラ — ヤナーチェクの	
《イエヌーファ》にみる‘モラヴィズム’の諸相	2
『楽』の『器』考 — 漢字文化記号論的視点より —	2
大会実行委員	2

1997年、第13回民族藝術学会大会を多摩美術大学上野毛校舎で開催します。シンポジウムのテーマを「東京」とし江戸より続く日本の首都としての東京を1997年の時点において、どのように捉えるかを、様々な角度から切り込みます。

「民族」と「東京」、「都市」と「村」は大変重いテーマであるはずですが。

巨大な国際情報都市として、ただ表面だけの模倣・愛撫に終わる、偉大な「村」=東京。

多摩美術大学には、「村」の観念から脱出しながら「村」で頑張っている、「東京焼」の中村錦平教授、「反住器」の毛織毅曠教授がいます。

二日目は、様々な分野での研究発表を行います。

多摩美術大学大会事務局

4月27日(日)

10:30～11:30	理事会	[第2会議室]
11:30～12:00	評議員会	[第2会議室]
11:30～	受付	[正面玄関内ホール]
	理事・評議員昼食	[第3会議室]
12:30～15:00	シンポジウム「民族芸術と東京」	[301教室]
	導入	写真集「Living Room, Tokyo」紹介
	ゲストスピーカー	瀬戸 正人 (写真家)
	インタビュアー	萩原 朔美 (映像)
	総司会	米倉 守 (美術ジャーナリズム)
	パネリスト	奥野 健男 (文学) 中村 錦平 (陶芸)
		福島 勝則 (演劇論) 毛綱 毅曠 (建築)
15:15～17:15	分科会	
	A 表現された東京、表現する東京	[AV-5]
	コーディネーター	萩原 朔美 (映像)
	パネリスト	川本 三郎 (文学・映画・都市)
		清水 邦夫 (演劇)
	B 発信と受信	[AV-6]
	コーディネーター	米倉 守 (美術ジャーナリズム)
	パネリスト	大橋 力 (感性科学) 木村 重信 (芸術学)
	C 世田谷	[AV-7]
	コーディネーター	福島 勝則 (演劇論)
	パネリスト	大島 清次 (世田谷美術館)
		進次五十八 (環境計画・景観論)
17:30～18:30	イベント アラブ古典音楽レクチャーコンサート [映像スタジオ]	
	ウッド(弦楽器)・ナイ(笛)・ダルブッカ(太鼓)のアンサンブル	
	演奏者	松田 嘉子 (ウッド) 竹間 淳 (ナイ)
		藤井 良之 (ダルブッカ)
18:30～20:00	懇親会	

4月28日(月)

9:30～	受付	[正面玄関内ホール]
10:00～12:00	研究発表	[301教室]
		「南蛮象牙蒔絵茶入」の意匠とカトリック信仰
		泉 滋三郎 (陶磁)
		藤山種廣と日本の近代ガラス産業
		井上 暁子 (ガラス)
		線の魔術師 — インド伝統鍍金職人・ドクラ —
		足立 眞三 (美術)
12:00～12:30	総会	[301教室]
12:30～13:30	昼食	[理事・評議員 — 第3会議室 [その他参加者 — 学生食堂]
13:30～16:30	研究発表	[301教室]
		朝鮮における近代舞踊確立 — 崔承喜と趙澤元の舞踊 —
		金 恩漢 (舞踊)
		岡本綺堂と江戸の怪談
		横山 泰子 (文学)
		民俗主義のオペラ — ヤナーチェクの《イエヌーフア》にみる
		‘モラヴィズム’の諸相
		内藤 久子 (音楽学)
		『楽』の『器』考 — 漢字文化記号論的視点より —
		朱 家駿 (音楽学)
	閉会挨拶	

民族芸術と東京

導 入

写真集「Living Room Tokyo」

ゲストスピーカー

瀬戸 正人 (写真家)

インタビュアー

萩原 朔美 (映像)

総司会

米倉 守 (美術ジャーナリズム)

パネリスト

奥野 健男 (文学)

中村 錦平 (陶芸)

福島 勝則 (演劇論)

毛網 毅曠 (建築)

東京にはあらゆるものがあるが日本だけがない。そういった外国人がいる。民族芸術学会のテーマとしては唐突ともいえるこの無国籍的で、模造食品的都市・東京のスタイルに民族芸術学的研究の視座が可能なのか。文学、現代美術、演劇、建築等、いろいろな切り口から検討、考察し、日々のあわただしさ、忙しさゆえにふと浮上してくる東京独特の空間・時間の余白が何なのかを探ってみる。

都築響一氏の「東京スタイル」、瀬戸正人氏の「部屋」という写真集がとらえた東京のいま、を手がかりに、あえて首都の体質のありかを、結論にこだわらない試論として問う。

profile

瀬戸 正人 セとまさと (写真家)

1953年、タイ国ウドンタニ市に生まれる。1975年東京写真専門学校を卒業、岡田正洋写真事務所に勤務。深瀬昌久の助手となる。受賞：日本写真協会新人賞(1990年)、東川賞新人作家賞(1995年)、第21回木村伊兵衛賞(1996年) 出版：「バンコク、ハノイ1982-1987」(I.P.C. 1989年)、「部屋」(新潮社1996年)

萩原 朔美 はぎわら さくみ (映像)

P09に掲載

米倉 守 よねくら まもる (美術ジャーナリズム)

P11に掲載

奥野 健男 おくのたけお (文学)

多摩美術大学名誉教授。附属美術館館長。1926年東京生まれ。東京工業大学化学コース卒業。東芝中央研究所。その間印刷配線基板の発明で大河内技術賞、特許庁長官賞を受賞。1961年から多摩美術大学教員。文芸評論家として「太宰治論」、「坂口安吾」、「三島由紀夫伝説」(文部大臣賞)、「文学は可能か」、「文学における原風景」、「問の構造」などで第12回平林たい子賞、日本建築学会文化賞、1995年紫綬褒章。

中村 錦平 なかむら きんべい (陶芸)

1935年金沢のちゃわんやに生まれる。69年カリフォルニアで陶制作。帰国後東京へ出稼ぎ。多摩美術大学油画科で現代陶芸を開講。受賞：「東京焼・タセラミックスで現在をさぐる」展で芸術選奨文部大臣賞(1994年)。現在多摩美術大学教授。東京焼窯元を自称。

福島 勝則 ふくしまかつのり (演劇論)

P12に掲載

毛網 毅曠 もつなきこう (建築)

1941年北海道生まれ。毛網毅曠建築事務所主宰。神戸大学工学部卒業。神戸大学助手を経て、1976年に毛網毅曠設計事務所を設立。「東洋の神秘」と言われる作風により、海外でも注目される建築家の一人。ヒトが宇宙や自然と生でできる風水的な建築をめざしている。受賞：日本建築学会賞、「高度情報都市設計競技」第一席、日本建築美術芸賞。主な作品に反住器、釧路市立博物館、釧路フィッシャーマンズ・ワー、石川県立能登島ガラス美術館などが。著作：「詠み人知らずのデザイン」(TOTO出版)、「都市の遺伝子」(青社)、「七福神招来の建築術」(光文社)、「バサイエンス」など多数。

表現された東京、 表現する東京

コーディネーター
萩原 朔美 (映像)

メディアの中の東京は、一体どのような表情をし、
何のメタファーとして登場しているのだろうか。

パネリスト
川本 三郎 (文芸・映画・都市)
清水 邦夫 (演劇)

写真、文学、映画、演劇の中の東京を散歩しながら、
東京というシンボルの変容をライトアップすることで、
芸術と都市との関係を探っていきたい。表現された東京を
追っていく内に、東京そのものが何かを表現している
メディアであることが浮き彫りにされるのではないか。
それも又、このセッションの面白さだと思う。

profile

萩原 朔美 はぎわら さくみ (映像)
1946年、東京生まれ。エッセイスト
像作家・演出家。多摩美術大学芸術
科教授 著書：「時間を生け捕る」
イルムアート社、「定点観測」(パル
出版)、「天使の声」(大和書房)、「こ
ムちゃくちゃ」(PHP出版)、「思い出
中の寺山修司」(筑摩書房)、「砂場
のガリバー」(フレーベル館)

川本 三郎
かわもと さぶろう (文学・映画・都市)
1944年7月東京生まれ。東大法学部
主著：「大正幻影」(サントリー学芸社)
「いまひとたびの戦後日本映画」、「
と東京」(読売文学賞)

清水 邦夫 しみずくにお (演劇)
1936年11月、新潟県に生れる。19
年、早稲田大学文学部演劇科卒業。
波映画に6年在職。その後劇作、演
の仕事を中心に活動。現在多摩美術
学美術学部二部芸術学科教授。

発信と受信

コーディネーター

米倉 守 (美術ジャーナリズム)

パネリスト

大橋 力 (感性科学)

木村 重信 (美術)

今、地方からの発信ということが多方面で話題になっている。東京からの一方的情報というスタイルへの反発でもあるが、日本の情報システムの不備を考え、高度な応答文化のあり方を探ってみたい。

東京対他都市というとらえ方ではなく、世界のなかの「東京」の発信と受信も考慮に入れて、その特質を見極められれば、と思う。

米倉 守 よねくらまもる (美術ジャーナリズム)
1938年1月生まれ。朝日新聞編集委員(美術担当)を経て、多摩美術大学教授(美術担当)を経て、多摩美術大学教授(美術担当)。美術評論、美術企画展等に広く関わり、著書：「ふたりであること・コミュニケーション・クロード・ロラン」「早すぎた夕映・有元利子」「運命の図像・中村彝」「個の創意」「産した視覚」「美の棲家」など多数。

大橋 力 おおはしつとむ (感性科学)

1933年3月14日生まれ。東北大学農学部農芸化学科卒業。東京工業大学手、筑波大学講師、放送教育開発センター教授などを経て、現在、ATR 人間情報通信研究所感性脳機能特別研究室長。千葉工業大学教授。作曲・演家 山城祥二として芸能山城組を主

木村 重信 きむらしげのぶ (芸術学)

1925年生まれ。京都大学卒業。京都立芸術大学教授、大阪大学教授をへ、両大学名誉教授。現在、国立国際美術館館長。民族芸術学会会長。文学博士。世界各地で多くの美術調査をおこな。著書：「美術の始源」、「アフリカ美術検」、「はじめにイメージありき」、「カハリ砂漠」、など多数。

世田谷

“世田谷系”という言い方が若い人の中で交わされているという。いったい何のことだ。

東京都世田谷区。37万世帯、77万人が住む郊外型住宅地域。彦根藩世田谷領20か村の古い歴史から先端都市計画を基におしゃれな風が吹き抜ける現代都市へ。その古層と新層を訪ねることは、まぎれもなく現代東京の鮮やかな断面を切り取ることになりはしないか。

三軒茶屋発着の“玉電”が横断する旧世田谷、若々しい演劇のメッカ北沢界隈、等々力や上野毛の閑静な住宅街が広がる多摩川辺り、成城を核とし緑陰濃い砦、そして武蔵野の原風景をとどめる烏山—— 実に世田谷は、駒場や駒沢また自由ヶ丘や田園調布の一部をも含み、多摩川沿いから井の頭や久我山に接して、大学だけでも12校、五島美術館や静嘉堂文庫など趣深い文化拠点が点在する、ちょっと垢抜けた東京人のライフスタイルをかいま見せてくれるシンボリックな東京でもあろうか。“世田谷系”とはそんなことを言うらしい。その世田谷を、都市計画の策定にも関わり「世田谷100景」に温かいエッセイを連載される造園学の進士五十八さんと現代美術の最先端を紹介しつづける世田谷美術館館長大島清次さんと語り合ってください。どんな世田谷アートシーンが、またどんな東京が見えて来ましょうか、ご期待下さい。

コーディネーター

福島 勝則 (演劇論)

パネリスト

大島 清次 (世田谷美術館)

進士 五十八 (環境計画・景観論)

福島 勝則 ふくしまかつのり (演劇論)

1943年、北海道生まれ。明治大学大学院演劇学修士課程修了。多摩美術大学教授。美術系大学に初めて演劇コースを設立し、演技演出の実技指導に当る一方で劇場文化史、空間演出論、演芸術論を担当。論文：「アドルフ・アピア1900-1915」、「ヨゼフ・スボボダ—マルチメディア・プロダクションの達人者」など。日本演劇学会理事、劇場演出空間技術協会会員、〈劇場文化ドキュメントの会〉副代表。

大島 清次 おおしませいじ (世田谷美術館美術評論家。世田谷美術館長。ジャポニズム研究学会理事長。大正13年生まれ。栃木県出身。早大文学部美術学専攻科卒業。受賞：平成5年度日本文化庁デザイン賞 著書訳書：「マネ」(講談社)「ジャポニズム」(美術公論社)、「ドガ」(岩崎美術社)他多数

進士 五十八

しんじいそや (環境計画・景観論)

1944年4月生まれ。東京農業大学教授・農学部学部長。農学博士。日本造園学会常務理事、日本都市計画学会理事、国土審議会専門委員。受賞：田村賞、日本造園学会賞 著書：「緑のまちづくり学」、「アメニティ・デザイン」、「ローラル・ランドスケープ・デザインの手法」(学芸出版社刊)など多数。



松田 嘉子 まつだよしこ

ウード奏者・アラブ音楽研究者。チュニス国立高等音楽院教授アリ・スリティにエジプト楽派のウード奏法と音楽理論を師事。アラブ音楽専門CDレーベル・バストラルレコードで3枚のCDをプロデュース。アラブ古典合奏団「ル・クラブ・バシュラフ」メンバー。多摩美術大学助教授。

(アラブ音楽ホームページ)

<http://www2m.meshnet.or.jp/~arabm/>

竹間 淳 ちくまじゆん

ナイ奏者・作曲家。チュニス国立高等音楽院教授スラフ・マナーにナイ奏法、同教授アリ・スリティにウード奏法を師事。ナイ及び理論の教授資格を有する。アラブ音楽専門CDレーベル・バストラルレコードで3枚のCDをプロデュース。「ル・クラブ・バシュラフ」主宰。

藤井 良之 ふじいよしゆき

サズ奏者・ダルブッカ奏者。イルハンオラルにサズ奏法、アドナン・バルベンにボズック調奏法、ジャフェル・ユドゥズにバーラマ調奏法と歌、サイド・アブドゥル・ワーヘドにダルブッカ奏法およびリズム理論を師事。「ル・クラブ・バシュラフ」メンバー。

アラブ古典音楽レクチャーコンサート

ウード(弦楽器)・ナイ(笛)・ダルブッカ(太鼓)のアンサンブル

演奏者

松田 嘉子 (ウード)

竹間 淳 (ナイ)

藤井 良之 (ダルブッカ)

アラブ音楽は、歴史的に見ればペルシャ音楽の流れを汲み、ギリシャ音楽とも深い関わりあいを持ちながら、さまざまな楽器や旋法、リズムを発達させ、それを伝える形で、西洋音楽の発達にも大きく寄与貢献しました。また、オスマン・トルコがアラブの勢力圏を支配下に入れてからは、トルコの宮廷の庇護のもとにさらなる発展をみました。

アラブ・トルコ・イランに代表されるマカーム(旋法)音楽は、西洋音楽にも匹敵する大きな音楽体系を形作っています。地理的に見ても、中近東、北アフリカ、スペインなどヨーロッパの一部、またトルコおよびその周辺諸国と、広大な範囲をカバーしています。

コンサートでは、ウード(弦楽器)、ナイ(笛)、ダルブッカ(打楽器)、レク(打楽器)などの楽器を用いて、アラブ音楽の特質であるマカームやイーカー(リズム)のうち、代表的なものの紹介をまじえながら、サマイ・サキールなどの古典楽曲やタクスイーム(即興演奏)などを演奏いたします。またトルコの弦楽器サズもご紹介いたします。

「南蛮象牙蒔絵茶入」の意匠と カトリック信仰

泉 滋三郎 (陶磁・神奈川歯科大学)

愛媛県今治市の愛媛文華館所蔵の「南蛮象牙蒔絵茶入」はイエズス会紋章と葡萄文によって装飾されている。茶入になぜイエズス会紋章と葡萄文なのかを考察し、茶の湯とカトリック関係に新しい視点を見いだした。

一六世紀に我が国に伝来したカトリック信仰で使われた聖具の技法・文様・図像を調査した。聖具に描かれた絵や文様にはキリスト像・聖母子像やイエズス会紋章ともに日本の伝統的意匠が描かれていた。絵や文様は必ず教義と関わりを持っていた。その結果から「南蛮象牙蒔絵茶入」に描かれた意匠もまたカトリックの教義と関係があると理解された。

茶入に葡萄文が描かれていることは、葡萄が葡萄酒を象徴し、葡萄酒はキリストの契約の血なのでミサにおける聖体拝領と関わることを意味する。「南蛮象牙蒔絵茶入」に茶を入れることは、茶が聖なる葡萄(キリストの身体)と同一視されていたこととなる。茶はカトリックの教義に関わり、葡萄がキリストの復活のシンボルであると同様に、蘇りをもたらすものとして聖なるものであったと解釈できる。茶の湯とカトリックの関係は影響ではなく、教義にまで及ぶものであった。

藤山種廣と日本の近代ガラス産業

井上 暁子 (ガラス)

藤山種廣は明治初年に設立された官営ガラス工場「品川硝子製造所」で重要な地位を占めた技師だったが、これまでその人物像や功績は断片的にしか知られていなかった。だが近年、彼が薩摩藩と並んで近代的ガラス製造の先駆けをなした佐賀藩精錬方出身の藤山文一であることがほぼ確実になり、またウィーン万国博覧会への派遣に際して行われた技術伝習の記録『硝子製造略記』の内容も明らかになった。

藤山種廣は官吏としてはじめて外国でガラス製法を本格的に学んだ人物で、当然その成果は日本の初期ガラス産業に反映されてしかるべきだった。しかし今回明らかになった資料から、実際には英国人技師の指導下にあった品川硝子でその経験が十分に発揮されたとは思われない。幕末から明治初年の激動期に西洋科学技術の移転に携わった藤山の軌跡を明らかにすることで、日本の初期ガラス産業、特に品川硝子がかかえていた諸問題を検証する。

研究発表
4月28日(月)
10:00～12:00
301教室

総会
4月28日(月)
12:00～12:30
301教室

線の魔術師 — インド伝統の鑄金職人・ドクラ —

足立 眞三 (美術・大阪芸術大学)

インドにはブロンズ製の特殊な鑄物がある。ジャングルに住む身近な動物である虎、象、孔雀、亀、魚。儀礼用祭器、神像、装身具。日常生活のミニチュア、壺、家畜の牛・山羊などの鈴。そのほとんどは蜜臘の線で原形が作られ造形化されるが、これらを製作する特殊技術の職人集団がいる。数州にまたがり居住する彼等の総称をドクラという。

ドクラには、インド中西部山岳丘陵地帯の部族社会(非アーリア民族)周辺に定住している者の他、仕事を求め村から村を渡り歩く集団もいる。

彼等の存在がヒンドゥー社会の一員としてインドで公式に認められたのは1950年以降であり、そしてドクラ製品の購入者、すなわち非アーリア部族民や製法に関する研究は多い。しかし、ドクラそのものに関する研究は皆無の状態まで現在に至っている。

ドクラの技法ならびに青銅製品と、今年偶然発見した線材のルーツなどドクラの実態を、都市部では分化している金属加工職カーストが現在もなお未分化である、オリッサ州パウラバニー県クムトムグダ村を中心に紹介したい。

第13回 民族藝術学会 総会 開会挨拶

1. 議長選出
2. 事業報告
(イ) 庶務および会報
(ロ) 例会
(ハ) 学会誌
3. 会計決算報告
4. 事業計画
(イ) 庶務および会報
(ロ) 例会
(ハ) 学会誌
5. 会計予算
6. その他

閉会挨拶

朝鮮における近代舞踊確立 — 崔承喜と趙澤元の舞踊 —

金 恩 漢

(舞踏・お茶の水女子大学大学院)

朝鮮の近代舞踊のパイオニア、崔承喜(1911-1975)と趙澤元(1907-1976)は、日本の現代舞踊の先駆者、石井漠の門下で現代舞踊を勉強し、後にそれぞれ独自の朝鮮舞踊を創造、その名を世界にまで広めた舞踊家である。

彼らは日帝植民地時代に、朝鮮を代表する舞踊家として、当時滅ぼされていく朝鮮舞踊を甦らせ、その芸術化や近代化に尽力し、最後まで朝鮮の民族舞踊家として活動を行った。初めは現代舞踊を習ったが、彼らを取り巻く当時の環境も大きく影響し、必然的に民族舞踊へと舞踊方向を変えざるを得なくなる。よって彼らは、現代舞踊技法に立った朝鮮舞踊の現代化を通して東西の調和を試みており、朝鮮の民俗を再発掘し、それを現代人の情緒に合わせて表現しようと努力した。その結果、彼らの舞踊は新しい時代の、新しい舞踊芸術の創出に理念の根をおき、朝鮮舞踊と西洋舞踊を結合するという朝鮮独特の近代舞踊確立に、決定的な役割を果たし、さらに現在の韓国と北朝鮮における民族的芸術舞踊の母胎となった。

岡本綺堂と江戸の怪談

横山 泰子 (文学)

19世紀の江戸では、鶴屋南北の怪談狂言をはじめ、文化の様々な領域において怪奇的なるものが、流行していた。江戸の怪奇趣味は、近代化が押し進められつつあった明治の東京の文化に、どのように生かされていったのだろうか。こうした問題を考える手掛かりとして、岡本綺堂の仕事をとり上げる。綺堂は子供の頃から、家庭で語られる市井の不思議な話に興味を持ち、三遊亭円朝の怪談噺を好んで成長した。長じて劇作家となり、皿屋敷の怪談をもとに近代的な視点から、幽霊の登場しない『番町皿屋敷』を書いたが、怪談に対する関心は生涯持ち続けた。

今回の研究報告では、江戸の怪談を「捕物帖」という新しいエンターテインメントに仕立て上げた『半七捕物帖』を初めとする探偵小説、新作の怪談狂言、恐怖小説の翻訳などの綺堂作品の中から、怪奇的要素を持つ作品を取り上げ、綺堂にとって「怪」を語るとはどのような行為であったかを考察する。

民俗主義のオペラ

ヤナーチェクの《イエヌーフア》にみる

‘モラヴィズム’の諸相

内藤 久子 (音楽学)

世紀末から20世紀初頭のチェコ・オペラにおいて、チェコ東部、モラヴィア地方の地域性を強く映し出すレオシュ・ヤナーチェクのオペラ《イエヌーフア》は、その現代的革新性に加えて、いわゆる(チェコ音楽におけるモラヴィアの方向としての)「モラヴィズム (Moravismus)」の音楽様式を決定づけた作品でもある。この創作の意味は、同地方を出自とする作曲者が、チェコ人としての文化的アイデンティティを西方のボヘミア地方にではなく、西スラヴ本来の特性をより強く表明しているとみられるモラヴィア、とくに東モラヴィア地方に求め、その地方をまさに象徴するような素材や音楽の特質を選択することによって、新しい様式のチェコ・オペラとして結実させたことにある。

本発表では、同オペラの様式上の源泉を探りつつ、作品に盛り込まれた様々な音楽的および音楽外的要因を通して、地域的アイデンティティに則った20世紀初頭の民俗主義オペラの諸相を、フォークロアやデクラマチオン等の観点から理論的に説き明かし、「チェコ音楽」という概念のもとでの、「モラヴィア・オペラ」の成立について考察する。

「楽」の「器」考

—漢字文化記号論的視点より—

朱 家駿 (音楽学・大阪大学)

日本における民族学、人類学と題する研究が、ときわ盛んな様相を呈している現在、新たに理論的枠組みを構築する必要性を痛感する。これら西洋起源の学問は、もともと自然民族や無文字社会およびその文化を対象とするもので、文献資料、ことに文字に対する配慮が足りなかった。漢字という特異な表記体系をもっとも大きな特徴とする中国や日本のような「高文化」社会での適用にはむりがあるからである。

本研究では、象形と表意の原理に基づく古代漢字は自然、社会、そして諸文化事象を模写し書き記した文化記号であると主張する独自の「漢字文化記号論」を民族音楽学の研究に導入した。このような視座より、楽器の始原的な意味や形態を追究しながら、それを日本の祭祀儀礼音楽に見られる種々の音楽、楽器の事例と結びつけて考察し、漢字文化圏における楽器、音楽、ひいては人間の音楽行動の本質と機能などを探りたい。

実行委員長 近藤 秀實

事務局長 小笠原 登志子

実行委員 小笠原 登志子

奥野 健男

加納 豊美

近藤 秀實

高橋 史郎

高味 寿雄

中村 錦平

萩原 朔美

福島 勝則

松田 嘉子

毛綱 毅曠

横山 泰子

米倉 守